

存在拘束性のナショナリズム

——丸山眞男と知識社会学——

新倉 貴仁

I. 問題の所在

I.1. 丸山眞男とナショナリズム

本稿は、戦前から1950年代前半までの丸山眞男の諸言説を「存在拘束性」の一貫という観点から分析し、再構成することを目指すものである⁽¹⁾。これは、丸山眞男の諸言説の分析を通じて、そのナショナリズムの特異性に接近する試みである。

丸山眞男の、とりわけその初期の思想には、「主体」と並び「ナショナリズム」の問題が一貫している(三宅[1996])。1990年代には、思想としてのナショナリズムが、丸山の議論を限界づけていることが指摘されてきた⁽²⁾。丸山の近代民主主義が均質な集合性としての国民を支えとする限りにおいて他者を排除するという批判(酒井[1996])、それが植民地主義の記憶の忘却の上に成立しているという批判(姜[1997])、その戦後啓蒙の思想に戦時動員の思想との連続性を見出す批判(中野[2001])などである⁽³⁾。

他方、小熊英二は、戦後の言説の地層を背景とした社会学的分析を通じて、丸山の思想としてのナショナリズムを救い出そうと試みている⁽⁴⁾(小熊[2002])。小熊は、丸山が、戦前の近代批判から、戦争体験を経て、近代の再評価に向かい、「総力戦体制の機能不全を目の当たりにして、新しいナショナリズムのあり方を構想した」と論ずる(小熊[2002: 67])。そこでは、丸山の思想としてのナショナリズムが、戦争体験や「当時の人びとが共通して抱いていた心情」から説明される。

しかし、批判と擁護の双方において、丸山の思想としてのナショナリズムが主題的に扱われる結果、それを支える学問的緊張が背景に退いてしまう。結果として、両者の議論にはいずれも、丸山が向き合った課題が欠落してしまう。第一に、丸山はナショナリズムという現象について、分析対象として距離化するだけでなく、自らがそれに内在するものとして向き合っている。すなわち、丸山のナショナリズムにおいて学問的探求の対象と思想という二つの相貌が連続することは、不作為の産物ではなく、強度の学問的思考を経たものである。第二に、丸山は近代という問題について、その構築とともに、乗り越えを課題としている。すなわち、丸山の思想としてのナショナリズムは、近代への問いと両立している。

I.2. 言説としての丸山眞男

ナショナリズムという問題系の中であって、丸山はそのナショナリズムが繰り返し言及される点において特異な位置を占めている。また、小熊が指摘するように、同時代における「革新ナショナリズム」の中であって、丸山はその「冷徹な分析」において特異な位置を占めている(小熊[1998])。すなわち、「丸山眞男とナショナリズム」という問題系の特異性は、それが複数の位相から構成されている点を考慮にいれなければならない。

第一に、ナショナリズムは、丸山の学問的探求の対象であった。第二に、ナショナリズムは、

丸山に思想として組み込まれ、きわめて自覚的に遂行されている。そして、第三に、丸山は戦後日本を代表する知識人として、その言説群の分析が日本のナショナリズムの分析の近似となるとみなされている。結果として、第四に、丸山は、ナショナリズムについての様々な言説が投下される中心点となっている。すなわち、「丸山眞男とナショナリズム」という問題系は、思想と学問的探求という丸山に内在した問題の水準と、丸山自身にナショナリズムを見出す外在的な視点の水準が混在した、複合的な言説体として構成されている。

この複合性ゆえに、「丸山眞男とナショナリズム」という問題系を、「ナショナリズムの言説」という視座を通じて検討する必要がある⁶⁾。言説という視座において、分析する言説と分析される言説は等価なものとして接続していく。これは、学問的探求の対象としてのナショナリズムと思想としてのナショナリズムを同時に扱うことを可能にさせる。また、丸山自身が強く自覚していた、分析者の位置を鋭く問い返す再帰性を分析に組み込むことができる。さらに、接続する言説群をも視野に入れることができる。言い換えれば、「ナショナリズムの言説」の視座を採用することによって、丸山の言説内にとどまらず、その外へと拡大していく「丸山眞男とナショナリズム」という問題系を論じることが可能になる。

しかし、このような問題設定は議論の出発点に過ぎない。重要なことは、「出来事」として屹立する「丸山眞男とナショナリズム」という問題系がいかにして可能となるのかを明らかにすることである。これは、言説の出現を、言説とは異なる水準の平面をたて、その結果として説明するものではない。問題は、そのような出現が効果として現れる言説の内的編制を追跡することである。丸山眞男という言説群が戦後日本のナショナリズムの問題の一つとして成立し

ているのは、いかなる言説上の効果として考えることができるのか。その現在の出現は、いかにして可能となっているのか。

それゆえ、本稿の課題は、「丸山眞男とナショナリズム」という問題系の内的編制を追跡していくことにある。丸山は、強度の理論的思考を展開する思想家であるゆえ、このような編制規則は、その課題とそれに応答する方法論から接近する必要がある⁶⁾。丸山にとって、ナショナリズムおよび近代の内在的分析という思想的課題と、新カント派およびマルクス主義との対決という学問的課題は、不可分に絡まり合っており、その課題に応答するためにマンハイムの知識社会学が要請されている。この知識社会学の論理に同行し、その臨界を見定めることによって、丸山という言説の複合体の編制規則を浮かび上がらせることができるであろう⁷⁾。すなわち、本稿は、「丸山眞男とナショナリズム」という「対象の内側からの把握を通じてそれを突き抜けて行くこと」を目指すものである(丸山[1953: 11])。

II. 丸山の学問的課題

II.1. マンハイムへの道——新カント派とマルクス主義の間——

マンハイムは、丸山がその思想と方法論を構成するうえで特権的な思想家といえる⁸⁾。その影響は、丸山の最初期の論考においてすでに見出される。マンハイムの『イデオロギーとユートピア』は、1936年の緑会懸賞論文「政治学に於ける国家の概念」の冒頭で参照されている。

社会に於て我々は常に主体であり同時に客体である。だから我々が社会を思惟するとき、そこにはもはや観察の主体と客体の分離はありえない。かくて観察の所産は必然的に研究者を通じて彼の所属する社会に錨づけられることになる。この事実を我々

は仮に、カール・マンハイムに従って思惟の存在被拘束性(Seinsverbundenheit)と呼ぼう。(丸山[1936: 5-6])

社会を思惟するという営みにおいて、観察するものと観察されるものは相互に絡み合っている。マンハイムが「思惟の存在被拘束性」と呼ぶ、この特性が、「社会科学の宿命的性格」と位置づけられ、丸山の著述活動の出発点に置かれている。思惟様式としての国家観の変容と、市民社会の変容を並行して論じた同論文の視座は、『日本政治思想史研究』の第一章での歴史記述へと引き継がれる⁹⁾。そこでは、徂徠学と朱子学という二つの思惟様式の連続性と断絶が分析され、「思惟様式」を対象とすることで、思想の社会的背景の究明と、思想間の構造的連関の解明が同時に可能となる(丸山[1940])。

このような選択の背景には、一方では、師である南原繁の新カント派哲学と、他方では、マルクス主義との対決があった。「当為と存在」、「理想と現実」のカント的二元論は、「現実の理想性を強調するところの保守的な支配層」と、「理想の現実性を根拠づけようとする無産層」のイデオロギーの間で無力となる(丸山[1975: 176])。他方、マルクス主義は思想を下部構造の反映に還元してしまう。この二つの間をすすむこと、すなわち、政治思想史を単なる反映論に陥らず上部構造と下部構造の関連で描くこと、また、思想の内在的な変動だけではなくそれが社会の変動の契機となることを描くことが丸山の学問的課題であった(丸山[1952: 288])。マンハイムの視座構造、思考範型、普遍イデオロギーといった概念は、社会的土台と個々の政治的=社会的諸観念を媒介するものである(丸山[1983: 90-1])。マンハイムの知識社会学は、「認識論をも包括する社会理論」であり、「カント的認識論とマルクス主義のイデオロギー論との双方にたいする、いわば二正面的な『挑戦』

を内包していたため」、マルクス主義と新カント派の間での丸山自身の苦悩に「共鳴」したのである(丸山[1978: 323])。

II.2. 存在に拘束された思考

では、マンハイムの知識社会学とはいかなる視座なのであろうか。マンハイムは、「存在拘束性」のテーゼを知識社会学の中核として定義している。

知識社会学は、最近成立した社会学上の一分科であって、理論としては、いわゆる知識の「存在拘束性」の学説を確立しようとするものであり、また歴史社会学的研究としては、この「存在拘束性」を過去および現在のさまざまな知識内容について明らかにしようとするものである。(Mannheim [1931=1969: 199])

知識社会学は、現在の思想的危機状況において明らかになった理論および思考方法の社会的拘束性を研究主題とする。知識社会学の中心性は、危機において明らかになった「存在拘束性」にあるのだが、これは対象の存在拘束性(「思考の存在拘束性の歴史社会学的研究方法」と観察者の存在拘束性(「思考の存在拘束性についての理論」)の両者を意味する。

対象との存在拘束性と同時に観察者の存在拘束性を認めることは、「普遍イデオロギー」という概念によって示される。これは、『イデオロギーとユートピア』においては、歴史的、社会学的分析のために精錬されたイデオロギー概念である。第一に、陳述の虚偽性を扱う「部分イデオロギー」と、陳述者の全体的な思考構造の真理性を扱う「全体的イデオロギー」が区別される。第二に、この全体的イデオロギーに関して、その考え方を敵対者のみに適用する「特殊イデオロギー」と、原理上いっさいの立場を、

つまり自己自身の立場すらもイデオロギーとみなす「普遍イデオロギー」が区別される。知識社会学は、この全体的イデオロギー概念の普遍的把握によって成立する(Mannheim [1952=2006])。

丸山は、思惟内容の存在拘束性を認めることによって、思想の自律性と思想が生み出された社会状況を同時に扱うことができる。だが、同時に、存在拘束性は思惟者の存在拘束性にまで及ぶ。先述の懸賞論文の中でも、「あらゆる社会的思惟の(従って自己も含めた)イデオロギー性の認識に徹底すること」という強度の自己反省が示されていた(丸山[1936: 7-8])。丸山における知識社会学の採用は、思惟様式の問題にみられる思想史の記述の方法論にとどまらず、それを思惟する丸山自身を捉える歴史性やイデオロギー性に対する徹底した認識をも意味する。それゆえ、丸山の諸言説には、「歴史意識と危機意識との間に存する深い内面的な牽連をあらためて強く意識せざるをえなかった」(丸山[1952: 292])という時代状況が刻み込まれることになる。

ここにおいて丸山の学問的課題への応答である方法論としての知識社会学の採用が、丸山の思想的課題に接合していく。川崎修は、『忠誠と反逆』の議論の検討を通じて、「丸山氏の思想が、ヨーロッパの二十世紀(とりわけ1920,30年代)思想、そしてまた現代の政治哲学とも、強い思想的同時代性を有している」と指摘している(川崎[1998: 489])。丸山の思想が有する、戦前のヨーロッパだけではなく、現在にも通じる思想とはいかなるものか。この指摘の意味をより詳細に見ていくために、知識社会学と丸山の思想的課題の関係を追跡していく必要がある。

III. 丸山眞男の思想的課題

III.1. 知識社会学の時代背景

知識社会学は、1920年代から30年代にかけて、

近代の危機、学問の危機を背景として登場した方法論であった。さらに、これは自然科学との対決の中で社会科学として立ち上がりつつあったドイツ社会学の潮流に位置する⁽¹⁰⁾。

第一次世界大戦という「科学とテクノロジーによる過剰殺戮」を経て、1917年にヴェーバーが、「合理化の底知れない病理と精神の危機」を「学問の危機」として総括した『職業としての学問』を講演する⁽¹¹⁾(姜[2003: 125-126])。徳永恂によれば、この講演は、「専門化・個別化が現代の科学の宿命であり、科学者は全体的認識という幻想を捨てて、この宿命に耐えなければならない」という認識に支えられている。だが、ヴェーバーは、専門化を引き受けながら、埋没することなく、なおも全体的認識を追求するという「欠如態としての全体性」を抱く。この全体性要求に対し、「静的・形式的総合」を目指すものの典型がリッケルトの科学論理学であり、「動的・内容的総合」を目指すものの典型がマンハイムの歴史主義的試みであるとされる(徳永[1996: 22-3])。

学知の危機が叫ばれ、全体的な認識の不可能性が明らかになりつつあるとき、知識そのものが研究の対象として浮上する。マンハイムの知識社会学もまた、「現代の思想的危機状況」(Mannheim [1931=1969: 199])という認識の中で生み出されたものである⁽¹²⁾。

丸山がマンハイムの「知識社会学」を参照したことの背景には、近代をめぐる危機意識という点での同時代性があった⁽¹³⁾。この点を精緻に論じた今井弘道は、川崎の指摘をさらにおしすすめ、丸山におけるマンハイムの重要性を浮かび上がらせている⁽¹⁴⁾。それは、「『思想』を、問題状況＝行為状況に拘束されつつ、同時にそれを超越する試みとして理解するということ、問題状況に被投されながら、問題解決行動へと企投しようとする行為に即して理解する」ということを要求するものである(今井[2008: 266])。

知識社会学は、その成立において、近代の危機と、全体的な認識の不可能性(問題状況への思惟者の内化)を刻印されている。知識社会学が中核に据える存在拘束性は、これらの時代状況への応答であったといえる。知識社会学は、「現実の中に内包されるに至った危機それ自体との、自覚的で主体的な対決の態度」(今井[2008: 248])を導く。丸山の思想的課題は、この知識社会学の圏域の中で改めて位置づける必要がある。

III.2. 近代への問い

第一の課題は、近代への問いである。これは、知識社会学における近代をめぐる危機意識に対応する。

丸山が日本の超国家主義を西洋近代との差分から分析したことは、周知の通りである⁽¹⁵⁾。また、戦前の「近代の超克」の風潮に対して、「近代」を救出する意図をもっていただけともよく知られている⁽¹⁶⁾。だが、森[1993]が摘出するように、丸山の諸言説には、近代の擁護者という整理では収まりきらない過剰さが内在している。

1948年に行われた東京大学法学部の「東洋政治史思想史」講義の開講の辞の一節は、戦後啓蒙や近代主義といったイメージが、丸山の相貌の一面でしかないことを示している。

我々は、一方で、社会のあらゆる面での封建制の克服と近代化が唱えられると同時に、他方では世界的規模において課題とされている「近代」(市民社会)そのものの止揚をも自己の課題とするという、二重構造的課題に直面している。この二重の課題は、日本の現在の民主革命の完成を著しく困難にしているが、まさにこの近代化の確立と現代化への脱皮という二重の課題こそ、封建制およびその思想の真に科学的な批判的

認識を可能ならしめんとする条件でもある。(丸山[1998a: 16])

もし封建社会があらゆる悪の根源ならば、それを否定し、そうではないもの(市民社会)を追い求めればよい。しかし、「我々は、封建的なものを、我々の身の至る所に、否、我々自身のなかにさえ巢食っているものとして持っている」。それゆえ、超越的に批判することは不可能である。また、「近代市民社会の矛盾が顕在化」した現在において、近代市民社会を全き善として想定することは不可能である。それゆえ、「市民社会と封建制との同時的・ヤヌスの解明」が必要とされる(丸山[1998a: 16-7])。

ここに、知識社会学の課題と丸山の思想的課題が合流していく地点が見出される。丸山の思想的課題は、西洋近代や近代的市民社会という理想像を仮構して、日本社会の封建的なものや後進性を暴きだしていくことではない。封建制の克服は、盾の半面にすぎない。その反対の面では、常に、近代市民社会が徹底して問題化される。丸山は、近代が全体主義という帰結を迎える時代を生きたのであり、その意味で、近代社会が最も先鋭に問題化された時代に位置している。そして、近代社会に対する透徹した問いが、丸山の思想の現在性を構成している。

III.3. ナショナリズムの内在的分析

第二の課題は、本稿が主題とするナショナリズムに関するものである。これは知識社会学における問題状況への思惟者の拘束に対応する。

丸山の諸言説において、ナショナリズムという主題は、「国民主義の『前期的』形成」(1944)以来、戦後まで連続している。『日本政治思想史研究』あとがき(1952)では、この論文に対し、「現在の私の課題と比較的に一番直接に連続する」とし、「私の日本ナショナリズムへの関心は本稿から発足したものである」と述べて

いる(丸山[1952: 292])。この主題の連続性は、「八・十五」以前と以後を、「私個人、および私の属する祖国の体験した数十年、数百年にも比すべき歴史的状況の変動」と位置づける丸山だからこそ、なお特筆すべきものといえる(丸山[1952: 285])。

敗戦後、丸山は「近代的思惟」(1946a)によって文筆活動を再開したとされてきたが、近年、それに先立つ日付が記された断簡が発見されている⁽¹⁷⁾。そこでは、丸山は、ナショナリズムの古典ともいべきフィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」を下敷きとして、日本国民にとっての自由について考察している。フィヒテは、1807年から1808年にかけて、ナポレオン軍占領下のプロイセンで講演し、敗戦した祖国の国民のうちに、人民自ら国家を担う「自主的能動的精神」が欠如しているのを見た。丸山もまた、「外国によって『自由』をあてがはれ強制された」日本国民のなかに、同様の欠如を観察する(丸山[1999: 181-2])。この「自主的能動的精神」の欠如というモチーフは、丸山の民主主義とナショナリズムに関する論考へと引き継がれていく⁽¹⁸⁾。

フィヒテの論考に自らを重ねるように、丸山の著作には、ナショナリズムについての学問的考察とネーションに向けた呼びかけという二つの性格が同居している⁽¹⁹⁾。1966年の座談会「現代日本の革新思想」で、丸山は次のように振り返る。

けっして戦後、ナショナリズムぬきで普遍民主主義だけをいわなかったつもりです。敗戦直後の時期に『中央公論』に書いた「陸羯南」のなかでも、今後の日本の課題は羯南らが中途半端にしかやらなかったナショナリズムと民主主義との結合の道を歩む以外にないと書いています。(丸山[1966: 11])

丸山は日本ナショナリズムの卓越した研究者であると同時に、デモクラシーとナショナリズムの内的結合を通じて、民主主義革命の達成を国民に呼びかける知識人でもあった。

このような丸山のナショナリズムの諸言説は、敗戦後の混沌、占領、世界の激動についての鮮烈な状況意識に由来する。この状況において、「問題はナショナリズム一般を否定したり抹殺したりすることではない」(丸山[1951b: 118])。むしろ、「このきわめてデリケートな、ヨーロッパの学界でも最も難問とされているイデオロギーを十分な内在的分析」によって解明することが必要とされる(丸山[1951a: 77])。

以上が示すことは、丸山にとってナショナリズムは「内在的分析」が目指される学問的課題であると同時に、戦後日本における民主主義の達成を果たすために欠かすことのできない思想的課題であった。ナショナリズムと民主主義を結びつける丸山の議論は、「問題状況に被投されながら、問題解決行動へと企投しようとする行為」において理解する必要がある。

IV. 存在拘束性という中心

マンハイムの知識社会学に組み込まれた問題意識を背景として、丸山は近代自体を問い返しながらか、ナショナリズムの内在的分析を提起していた。丸山の思想が知識社会学の圏域にあるのであれば、丸山のナショナリズムは、知識社会学の中核である「存在拘束性」のテーゼから再構成することができる。以下では、思想史と政治学という丸山の主要な二つの学問領域と、丸山によるナショナリズム分析に組み込まれた「存在拘束性」を摘出し、それがもたらす帰結を追跡していく。

IV.1. 思想史における存在拘束性

存在拘束性のテーゼに従うならば、観察者は、対象を自らが規定すること、そして対象が自ら

を規定することを強く意識せざるをえない。丸山の歴史記述の方法論には、存在拘束性のテーゼが組み込まれている⁽²⁰⁾。

観察者が歴史内存在であり、同時に、観察者が歴史を構築するという考えは、初期の著述にすでに認められる。1943年に書かれた書評「清原貞雄『日本思想史 近世国民の精神生活』上」では、思想史的記述において、対象選定をするうえでの観察者による構築という契機が不可避的に付随することが言及されている。

精密機械はいかに分解しても対象の物質的性質そのものは変わらない。が思想史にはそうした意味での対象の固定性がない。思想史の素材は解釈を通じてのみ我々の認識の対象になりうるが、それが解釈された瞬間、素材の本来の相貌は永遠に失われる。そうしてその代わりに、解釈を通じて史家自身の価値体系が不可抗的に介入して来るのである。(丸山[1943: 209])

だが、歴史叙述の主体性の契機は、歴史叙述の恣意性を意味するものではない。主体性の契機を認めた上で、なお厳粛な「禁欲」が要求される(丸山[1943: 217])。

また、1942年に発表された「神皇正統記に現われたる政治観」において、歴史記述が現実への働きかけ、実践といった性質を有することが言及されている⁽²¹⁾。

〔神皇正統記は〕本来的に「行動」の書であった。従ってそこでは史的叙述というも、終始現在意識によって貫徹され、歴史的過去も親房に於ては現在に於ける過去であり、「代下れりとてみづから賤しむべからず。天地の始めは今日を始めとする理あり」という如く行為的主体により未来に転換さるべき過去にほかならぬ。(丸山[1942: 166])

歴史は常に現在という時点に拘束された意識が認識する過去である。その記述は現在の問題意識によって貫かれる。過去は現在の観点から再構成される。同時に、記述は未来へと向けて投げかけられる実践となる。すなわち、過去はそれを未来へと転換させる可能性の源とされる。それゆえ、その思想は、「つねにその背後に潜む実践的意欲から動態的に理解されなければならない」(丸山[1942: 167])。

このような歴史記述についての考察は、マンハイムが、トレルチの「現在の文化総合」(gegenwärtige Kultursynthese)の「究極の意味」について述べる部分と重なりあう。

歴史認識が一定の精神的立場から、未来を意欲し・未来に積極的に働きかける主体からしてはじめて可能である(…)未来の形成をめざして現在行為しつつある主体が抱く関心からのみ、過去の観察は、はじめて可能となる。現在の活動性の方向からしてのみ、歴史的選択の方向、客観化と叙述との形式が、はじめて理解できる。(Mannheim [1924=1969: 26-7])

以上のように、丸山は思想史の中心に「存在拘束性」を置いている。①研究者は歴史内存在である。②歴史の素材は認識を通じて対象となるように、認識と対象は相互規定的である。それゆえに、歴史記述は、③歴史に働きかけることを自覚し、同時に恣意性を排除するという禁欲をし、なお④未来を意欲するという実践へと向かう。すなわち、存在拘束性から帰結する実践への志向と、客観性への志向との間の緊張が、丸山の歴史記述を特徴づける⁽²²⁾。

IV.2. 政治学における存在拘束性

丸山の政治学もまた、存在拘束性の観点から再構成されている。思想史において確認される

①観察者の内在、②認識と対象の相互規定性、③構成と客観性との緊張、④投企としての実践という四つの契機は、1947年の「科学としての政治学」という論稿に見出される。

主体の認識作用の前に対象が予め凝固した形象として存在しているのではなく、認識作用自体を通じて客観的現実が一定の方向づけを与えられるのである。主体と対象との間には不断の交流作用があり、研究者は政治的現実「実存的に、全思考と全感情をもって所属している」。むしろこうした事実は狭義の政治的思惟にかぎらず、社会的経済的現実を対象とする学問一般に妥当するいわば社会科学一般の宿命とも考えられるが、未来を形成せんとして行動し闘争する人間乃至人間集団を直接の対象とする政治的思惟において、認識主体と認識客体との相互移入が最高度に白熱化する事実から何人も眼を蔽うことは出来ない。この世界では一つの問題の設定の仕方乃至一つの範疇の提出自体がすでに客観的現実のなかに動いている諸々の力に対する評価づけをふくんでいるのである。(丸山[1947b: 148])

政治学では、「認識と対象との相互規定関係の存在」を率直に承認すること、「自己を含めて一切の政治的思惟の存在拘束性の承認」を行うことが求められる。この結果、「政治的世界では俳優ならざる観客はありえない」。もし、観客であるかのように客観的な観察者を装うのであれば、それは「自己欺瞞」であり「有害」ですらある。そうではなく、「学者が政治的現実についてなんらかの理論を構成すること自体が一つの政治的実践にほかなら」ないし、この意味における実践を通じ、学者は政治的現実主体的に参与する(丸山[1947b: 149])。

この存在拘束性、すなわち思惟者による対象

の規定と、対象による思惟者の規定が不可避であることは、理論に著しい主観性とイデオロギー的性格を付着させるものである。だが、その「宿業」を無視するのではなく、引き受け、どこまでも学問の客観性をめざして、イデオロギーによる歪曲を可能な限り排除していかなければならない。政治学は、「理念としての客観性と事実としての存在制約性との二元のたたかいを不断に克服」することを通じて展開されなければならない(丸山[1947b: 151])。

以上のように、丸山の政治学もまた、「存在拘束性」を中心に再構成される。研究者は政治的現実の内属している(①)。対象は予め存在するのではなく、認識者により構成される。認識と対象は相互規定的である(②)。結果、政治は、自らの主体的参与を自覚し、同時に学問の客観性を目指して禁欲しつつ(③)、なお未来を形成する政治的実践に向わなければならない(④)。存在拘束性を承認することから帰結する実践への志向と、客観性への志向との間での緊張が、丸山の政治学を特徴づける。

この論稿の背後には、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』第二部「政治学は科学としてなりたちうるか」の影響を見出すことができる⁽²³⁾。そこでは、「政治」は、「行政」と対比され、非合理的な余地に由来する「決断」と関連して定義されている(Mannheim [1952=2006: 205-9])。この規定は、丸山の「政治」の定義に一貫するものである。1960年の「政治学」についての講義では、政治過程を無数の決断の集積とみている(丸山[1998b: 20])。政治における一般的状況認識と個別的決断の間にはつねにとびこえなければならぬ深淵があり、これが政治における非合理的契機(「やってみなければわからない」)の根源となる(丸山[1998b: 27-28])。すなわち、丸山において政治的に参与する「実践」は、合理性の臨界において出現する「決断」として描かれている。これは、「政治は本質的

に創造であり形成である」と述べた丸山の最初期の論稿から続くものである(丸山[1936: 6])。加えて、政治が一つの政治的実践とされるように、学問における実践もまた「創造」や「形成」といった性格を帯びる。これは、丸山の思想史に組み込まれた、過去の可能性の未来への投企という契機にも共通する性質である⁽²⁴⁾。

IV.3. ナショナリズムにおける存在拘束性

丸山がナショナリズム一般の内的構造として示すものは、思想史と政治学において見出された「存在拘束性」の前提とその帰結に近似している。これは、1949年の東京大学法学部「東洋政治思想史」の講義にみることができる。

丸山は、現象としてのナショナリズムの両義性を認めつつ、それを「あるネーションの統一と独立と発展を志向するイデオロギーである」(丸山[1999: 16])と定義する⁽²⁵⁾。だが、ネーションという語はきわめて定義が困難である。そのため、「ネーション或いはナショナルティーという社会的統一体を可能にするエレメントを支えているものは究極において、矛盾するようだがナショナルティーの意識、いわゆる民族意識以外にない」ことが導かれる。すなわち、「国民意識を除き去れば国民というものは存立しえない」(丸山[1999: 17])。これは、ネーションの实在を前提とするのではなく、ナショナリズムがネーションを生み出すとする議論である。だが、ネーションは、主観に還元されるものではなく、歴史の推進を支える「一つの客観的实在」でもある。この性質のため、ネーションの規定は同義反復的にならざるをえない。すなわち、「国民とは畢竟、国民たろうとする存在にほかならない」(丸山[1999: 18])。

この規定が、ナショナリズムにおける「緊張」と「決断」をもたらす。丸山は、ナショナリズムと郷土愛を「決断」という点で区別している。「郷土愛とは畢竟環境愛にほかならず、環境愛

は自己の外なるものへの伝習的な依存であるのに対し、国民の国家への結集はどこまでも一つの決断的な行為として表現されねばならぬ」(丸山[1999: 20])。結果、ナショナリズムは、自然的・連続的・本質的と見られる生存形態と対立、矛盾する。同時にそのような決断的行為であるナショナリズム自体が、緊張と決断によって構成されている。

ナショナリズムの精神構造は、こうした最もプリミティブな心性と、他方最も高度な精神形態との矛盾的統一である。しかも非合理的な心情自体が、エゴイズム(拡大された自我感情と、国家に投影された自我)とアルトウイズム(犠牲的精神)の矛盾的統一である。ここにナショナリズムが人間を内面的に最も深く捉える所以がある。(丸山[1999: 23])

ナショナリズムは、「最も高度な精神形態」が情念的なもの、非合理的な側面と接合したものである。丸山は、「国民と国家を一体化」しようとするナショナリズムにおける意思の働きを、「人間のかつて到達した最も高貴な意識、最も高度な精神的理性的な自己責任、決断の共同意識」として、極めて高く評価する。だが、同時に、それは情念的なものの束縛を逃れることはできない。この相反する二つの相貌の間の「緊張」が、丸山の見るナショナリズムの構造の深淵である。

このような丸山が示すナショナリズムの構造は、思想史と政治学の緊張の構造と同型となる。これは、「国民とは、畢竟国民たらんとする存在」という同義反復の規定から帰結する。この同義反復の構造において、対象としての国民の外部に、主体としての国民は存在せず①、対象としての国民は主体としての国民の決断に委ねられ、主体としての国民は対象としての国民

に条件づけられるという相互規定性が生じる(②)。さらに、「ネーションたらんとする主体的決断」(④)が本質とされ、その背後には理性的な精神と非合理的な情念との間での緊張(③)が見出される。すなわち、最も原始的な心情をあたう限り合理化するという緊張に身をおきながら、国民たらんとする意思において、存在拘束性を引き受け決断するところに、丸山はナショナリズムの本質を見出している。

V. 存在拘束性のナショナリズム

V.1. 存在拘束性と決断

思想史、政治学、ナショナリズムという丸山の三つの研究領域において、存在拘束性から帰結する緊張と実践という構図を見出すことができる。

対象による主体の規定と、主体による対象の規定という相互性が、社会科学一般の前提とされるため、思想史や政治学といった学問の方法論は、この特徴によって再構成される。主体と対象の相互規定という円環の中で、対象を記述し、構成するという決断の契機と、それについての強度の自己反省の契機が緊張して共存する。

同様の構造が、ナショナリズムの理論的考察の中にも見出される。「国民とは国民たらんとする存在である」というナショナリズムの同義反復的な構造の中には、主体と対象の相互規定性と、その円環を断ち切る決断という要素が見出される。この決断と、非合理的な心情による束縛との緊張関係が、ナショナリズムの精神的構造の深淵とされる。

しかし、政治学、思想史、ナショナリズムは、存在拘束性もたらす緊張と決断という構図において同型的に思えるが、三者の間には断線が走っている。思想史と政治学においては、自己の決断は学問としての客観性への志向との間の緊張に置かれている。だが、ナショナリズムに

おいては、自己の決断は非合理的な心情との間の緊張関係に置かれている。すなわち、思想史と政治学という学問と、ナショナリズムという現象では、同型の緊張関係が見出されながらも、自己の決断が、一方では客観性の志向の対極に位置し、他方では非合理的な心情の対極に位置している。

結果として、丸山の議論の中における「決断」はきわめて不分明なものとなる。学問における客観性への志向は普遍性へと通じていくが、ナショナリズムにおける非合理的な心情はどこまでも特殊なものにとどまる。自己の決断の契機は、普遍性と特殊性という二つの極の間で振幅を描く。言い換えるのであれば、思想史、政治学、ナショナリズムのいずれをも貫く核心に位置する決断は、合理性の臨界という性格をもつが、それ自体が「非合理的契機」とされるものから、「非合理的な心情」と対立するものまでの振幅を描いている。

V.2. 対象の存在拘束性と観察者の存在拘束性

存在拘束性による自己と対象の緊張関係は、帰結として決断を招きよせる。これは、「対象の存在拘束性」と「観察者の存在拘束性」という知識社会学の二つの水準の理論的位相の違いが必然的に引き起こす事態といえる。

対象の存在拘束性において、拘束する存在因子をいくら複数化、複雑化しても、対象を認識する観察者はその都度、新たな諸因子を認識に加えていけばよい。観察者の、観察者としての位置は、対象の存在拘束性の複数化、複雑化によって脅かされることはない。

しかし、観察者の位置そのものを扱う観察者の存在拘束性は、全く異なる問題に直面する。観察者の存在拘束性は、宣言としては成立しても、原理的には達成されえない。それは記述するという行為と相容れない。いや、記述の水準での操作では処理不可能な問題なのである。な

ぜなら、観察者の存在拘束性を原理的につきつめるなら、ある陳述に対し、その陳述の存在拘束性が示され、さらに、その存在拘束性を言及する陳述の存在拘束性が求められ……、といったように無限後退していくからである。

このような対象と観察者における存在拘束性の理論的位相の違いが、存在拘束性というテーゼから帰結する臨界を示している。自己の存在拘束性をも認めることで成立する知識社会学は、認識主体と認識客体の理論上の差異を無化することを方法上の賭け金とする。近代的な批判が、擬制的な外部を仮構することで成立するのに対し、知識社会学はそのような外部を否定した内在的記述を目指す。だが、上で確認したように、記述の水準で認識主体と認識客体を同等化することは不可能である。結果として、記述するという行為は、観察者の存在拘束性の前提に対する「裏切り」としてしか出現しえない。すなわち、「決断」は、「存在拘束性」のテーゼによって不可避免的に引き起こされるものなのである。

V.3. 臨界としての決断

以上、本稿は、丸山眞男における存在拘束性のテーゼの一貫性と、その存在拘束性のテーゼが必然的に招来するアポリアを確認した。このアポリアが理論的水準では解消されえないこと、これが丸山眞男のナショナリズムの言説の核心に位置する。

この不分明な決断を、丸山の限界として指摘することも可能であろう。だが、これは丸山の強度の理論的考察が行き着いた臨界でもある。すなわち、丸山のナショナリズムの特異性は、この臨界が生み出す機制を考察することで見出される。

第一に、存在拘束性のアポリアゆえに生じる不分明な決断は、その帰属先としての決断する主体を結晶させる。丸山の諸言説に主体の主題が一貫することは、この存在拘束性の帰結と考

えることができる。丸山の諸言説は、存在拘束性が引き起こす崩壊を、決断 - 主体の連関によって防ぐという緊張のダイナミズムによって編制されている。だが、この決断する主体は、自律的で自由な主体ではない。決断に存在拘束性が先行するように、この主体もまたすでに状況に投げ込まれた存在なのである。言い換えるのであれば、その根源に他者性がぎざまれた「主体」なのである。

第二に、自らの方法論についての事後的言及が繰り返される⁽²⁶⁾。丸山は、具体的な歴史記述の水準では、思想を社会階層に紐付け、対象の存在拘束性を組み込んでいるが、観察者である丸山自身の存在拘束性を組み込むことには成功していない。その欠落の代補として、方法論についての諸言説が存在する。事後的に言及することによって、過去に行われた観察は対象として処理可能となる。そして、その存在拘束性を論じることで、擬制的に観察者の存在拘束性をあつかうことができる。だが、その成立のために事後的言及を必要とするという構造は、他の多くの言及が丸山の諸言説に接続していくという事態を導く。結果、丸山眞男は、複数の言説群が連なる、言説の複合体として出現することになる。

存在拘束性のアポリアは、決断へと帰結する。この決断は、丸山の諸言説の内的構造を攪乱する危険性をもつ脆さとなる。だが、その脆さゆえに、主体には他者性が刻印され、諸言説は無数の言説との接続へと開かれていく。「丸山眞男とナショナリズム」という問題系は、丸山の諸言説だけではなく、丸山についての無数の諸言説をも含んで成立している。この膨大な言説の複合体が産出される機制の源にあるものが、丸山自身の諸言説の内的構造に見出される脆さであり、それを引き起こす存在拘束性のテーゼなのである。

VI. 結語

以上、本稿は丸山における存在拘束性を中核とする方法論(知識社会学)とそのナショナリズム言説の関連を確認してきた。丸山にとって、知識社会学は新カント派とマルクス主義との対決という学問的課題に対応するものであると同時に、近代の危機と問題状況への内化において思想的課題へと接合するものであった。知識社会学の中核となる存在拘束性のテーゼは、その最初期の論文においてすでに開始され、思想史、政治学、ナショナリズムといった丸山の主要な領域を貫いている。だが、この存在拘束性は、不分明な決断へと帰結する。これは、観察者の存在拘束性が論理的にもたらすものである。観察者の存在拘束性が原理的に孕まざるをない、対象と主体の距離の無化(内在記述)の失敗に対し、決断 - 主体という連関が挿入され、事後的言及が繰り返される。この存在拘束性のアポリ

アが、丸山のナショナリズムの臨界を描き出している。

しかし、臨界は同時にその外部との接触面でもある。存在拘束性から帰結する決断は、被規定性という点で他者へと開かれている。また、無数の自己言及は、自らの学問と思想を他の言及に開かれた言説複合体へと変容させるものでもある。「丸山眞男とナショナリズム」という問題系は、不分明な決断という脆さと、他者への開かれもともに内包するものである。ここに丸山の限界を見出すことも、可能性を見出すことも、ともに可能であろう。しかし、間違いなく、丸山のナショナリズムが示す臨界を、その彼岸へと向かう運動のひとつの出発点に変えることは、丸山に後続する我々の課題である。

※本稿は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

註

1. この時代区分は、三宅[1996]に準じている。
2. 丸山批判の諸類型については、小林[2003]を参照。この潮流の批判の最も総括的なものとしては葛西[1999]を参照。これらの批判には一定の妥当性と有効性があると思われるが、その前提として「丸山眞男とナショナリズム」という問題系を十分に内在的に理解する必要がある。
3. 研究対象であるナショナリズムに研究者が組み込まれるという事態は、ナショナリズム研究で指摘される理論上の陥穽の典型である。例えば、「ナショナリズムやネーションを構築主義的な視点から批判する議論では、しばしば批判や脱構築の対象としてのネーションを逆に実体化し、その時代や社会の経験をナショナリズムという視点から機能主義的に再構成しがちである」(内田[2001: 4])。また、「理論の上でネーションを現実的なものとして取扱うことよって、実践の上でネーションを現実的なものとして取扱うことを、意図せず、再生産したり、強化したりすることを避けなければならない」(Brubaker [1996: 16])。この構造の分析として新倉[2008a]を参照。
4. リベラリストとしての丸山の姿を描き出す苅部[2006]もここに含まれると思われる。
5. 「ナショナリズムの言説」とは、ナショナリズムをフーコーのいう言説編制体とみなすというナショナリズム研究上の視座である。そこでは、ナショナリズムは、「世界を見、解釈する特定の手法、我々の周囲にある現実を構築し、意味あるものとする参照の枠組み」(Özkirimli [2005: 29-30])とされる。本稿は、この視座から丸山眞男のナショナリズムを分析する試みでもある。なお、同様の視座は、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』の中にすでに見出される(Anderson [1991=1997])。アンダーソンに依拠しながら、この視座を論じたものとして新倉[2008b]を参照。

6. 丸山の方法論についての議論として、様々な二元的要素の間の「緊張」の一貫性を見出す石田[1998]、〈生〉と〈形式〉の対立・緊張として再構成する笹倉[1998]などがある。方法論に関し最も包括的な議論を展開する松沢[2002]は、伝統の創出という決断の契機と近代への問いに着目する点で本稿と共通するが、「存在拘束性」に対して「超越的な普遍的原理」を優越させている。だが、今井[2008]が論じるように、師である南原に対し、丸山はヘーゲルの影響を保存しつつ「存在拘束性」を維持しつつけている。本稿は、これらの方法論をめぐる議論に多くを負いつつ、その方法論をさらにナショナリズムの問題系へと関連づける試みである。
7. この課題は、言説分析と知識社会学の方法論的差異についての議論に貢献すると思われる。佐藤[2006]は、言説分析とテキストの知識社会学の違いを、確定単位境界や特権的な観察者といった、意味の成立に関与しない「外部」を想定するか否かに求める。遠藤[2006]は、「言説分析とは、社会の全体性や、全域を見渡す超越的視線を、それと気づくことなく執拗に想定させる何かとの闘争である」として、社会という全体性／全域性を賭け金とする。橋爪[2006]は、「知識社会学と言説分析は、異なる時代の異なる状況を背景にした、異なる研究方法である」とし、知識社会学がイデオロギーという概念が説得力を有していた時代の産物とする。本稿は、その決定的な違いを、内田[2005]が指摘するように主体を前提とするか否かに求める。これは佐藤[2006]が指摘する「外部」の問題でもあるが、この点については稿を改めたい。
8. 丸山におけるマンハイムの影響については、安丸[2002]が主題的に論じている。だが、その影響は政治思想史の方法論に限定され、マルクス主義への対抗のための根拠に限定されてしまう。
9. 『日本政治思想史研究』の執筆にあたって、マンハイム、ウェーバー、ボルケナウが思想的背景であった(丸山[1952])。この三者の中で、マンハイムの影響は突出したものとして回顧される。大学三年生のときに読んだマンハイムの『イデオロギーとユートピア』は、『知識社会学』や『知識社会学の問題』といった論考と並び、自らの「思想史・精神史へのアプローチに決定的に『影響』した著作」であった(丸山[1978: 325])。
10. ヴェーバー、ジンメルといったドイツ社会学が自然科学と精神科学の大規模な対決という認識論的問題に従事していたことは、Weber [1950=1987]を参照。友枝[2006]は、知識社会学と言説分析の考察の中で、「言説分析の方法は、社会学理論の大前提ともいうべき自然主義的な立場に異義を唱え、異なる方法を提出している」としている。「自然主義的な立場」とは、「社会科学の方法と自然科学の方法との同一性を強調する立場」であり、「研究対象もしくは分析の単位を確定することができ、この確定された対象を分析することによって、①概念構成および②命題構成からなる純粋理論を構築できるとする立場である」(友枝[2006: 245])。だが、全体性の断念、自然科学的方法との対立は、むしろ知識社会学を特徴づけるものである。
11. 鷲田はこの時期に登場した思想潮流を「純粋主義purism」として捉えている。フッサールの「純粋現象学」やケルゼンの「純粋法学」、さらには「純粋芸術」など、純粋主義は、「それぞれに固有の領域が、それにとって偶然的でかつ非本質的な契機の混入によって解体しつつある」という危機意識を共有する(鷲田[2007: 32])。この危機への対応として、それぞれに固有の純粋な領域を構築し、「純粋に形式的なものの領域」が求められる。
12. 「知識社会学のもつ本来の狙いは、危機に曝されているわれわれの思想状況を状況報告の形で受けとめ、全体性をめざす志向によってさまざまな事象の脈絡をとらえようとする以外に何のものでもない」(Mannheim [1952=2006: 194])。また、秋元・澤井[1992]も参照。
13. 1920年代から30年代にかけてのヨーロッパにおける「危機意識」に対する、丸山の認識については、丸山[1959]を参照。
14. 今井は、丸山眞男におけるマルクス主義、田辺元、ヘーゲル哲学という線分を追跡し、危機の思想家として、丸山とマンハイムの重なりを見出している。「思想の意味は、問題状況との相関においてある。問題状況とは、危

機を孕んだ状況であり、同時に解決への希望を孕んだ状況である。危機が希望と表裏一体であるような状況である。思想は、そのような状況の中で、その危機を希望に転ずる行為を促すもの、そしてそのような行為につながる思考を促すものでなければならない。かくして、思想は、それが真なるものであるためには、自らが単に状況を超越した存在であり続けることを否定して、それを不断に状況内化させていなければならない」(今井[2008: 262])。また、この考察の前提となる今井[2004][2006]も参照。

15. 例えば、丸山[1946b]を参照のこと。
16. 例えば、丸山[1946a]を参照のこと。
17. 従来、丸山の戦後最初の著述とされてきた「近代的思惟」は、一九四五年十二月三十日の執筆日付をもつが、この断簡は、「昭和二〇年十一月一日」の日付をもつ。小熊[2002]は、終戦後最初の著述が「近代」を主題とすることを重視しており、この点でも丸山におけるナショナリズムという問題を再考する必要がある。
18. 「長きにわたるウルトラ・ナショナリズムの支配を脱した現在こそ、正しい意味でのナショナリズム、正しい国民主義運動が民主主義革命と結合しなければならない(…)改正憲法の公布にあたり、われわれは、国民に与えられた諸権利を現実に働くものたらしめ、進んでより高度の自由を獲得するために、よほどの覚悟をもって、これまでに数倍する険峻をのりこえて進まなければならぬであろう」(丸山[1947a: 105-6])。
19. この呼びかけの構造についての批判的な分析として酒井[1997]を参照。
20. 思想史の方法論について丸山[1961]も参照。また、歴史主義をめぐって、ポパーの『歴史主義の貧困』について強い反発をしめしている(丸山[1980])。
21. 後年、丸山はこの小稿において「歴史家としては本来乱用をきびしく慎まなければならぬこと」を行ったと告白している。「『形勢ごとごとくわれに非なり』という状況の下に著されたこの古典を、私は眼前の暗澹たる思想的光景に所々意識的にダブらせて解説したのです」(丸山[1978: 341])。
22. 「『歴史的拘束性』は、後に見られるような受容的な『被制約性』(Engagiertheit)を意味していない。むしろ歴史への積極的な『参加』(Engagement)が『真理への根ざし』(Verwurzelung)を保証する」(徳永[1996: 273])。
23. この章から強い影響を受けたことについては、丸山[1978: 346]を参照。とりわけその影響は、緑会懸賞論文にすでに見出される(丸山[1936])。マンハイムが次のように政治学の困難を特徴づけるとき、ほぼ丸山のそれと重なる。第一に「ここで問題になるのは、固定した対象のもつ性格ではなく、傾向であり、生成のうちで把握され、たえず形を変える、流動的な動態であり、生命力である」。第二に、「ここでは作用しあうさまざまな力の配置の状況が常に変化する」。第三に、「考える主体である理論家自身、この非合理的な活動の余地の外にはなく、闘争しあうさまざまな力にかかわっている」。第四に、「問題を設定する独自の仕方も、カテゴリーの道具立てさえ含めた思考法のもっとも普遍的な形式も、じつは、理論以前の政治的な基盤によって拘束されている」(Mannheim [1952=2006: 210])。
24. 丸山における政治学と政治思想史の性格の連続性については、孫[2006]を参照。
25. この規定は、ナショナリズム研究における「近代主義」代表的論者であるホブズボームの議論と重なる。ホブズボームもまた、ネーションの主観的定義と客観的定義を断念し、ナショナリズムがネーションを生み出すとする。しかし、ナショナリズム研究者がナショナリストではありえないというホブズボームに対し、ナショナリズムを思想として引き受ける丸山は、興味深い対立を描いている(Hobsbawm [1992=2001])。
26. 自らの方法論についての遡及的言及としては、丸山[1952][1978][1983]など。この言及の構造については中野[2001]が精緻に論じ、戦中と戦後を断絶させる仕掛けとされている。

文献

- 秋元律郎・澤井敦(1992)『マンハイム研究：危機の理論と知識社会学』早稲田大学出版部。
- Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London; New York: Verso. = (1997) 白石さや・白石隆(訳)『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT出版。
- Brubaker, Rogers (1996) *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- 遠藤知巳(2006)「言説分析とその困難(改訂版)：全体性／全域性の現在の位相をめぐって」佐藤俊樹・友枝敏雄(編)『言説分析の可能性：社会学的方法の迷宮から』東信堂, 27-58.
- 橋爪大三郎(2006)「知識社会学と言説分析」佐藤俊樹・友枝敏雄(編)『言説分析の可能性：社会学的方法の迷宮から』東信堂, 183-204.
- Hobsbawm, Eric (1992) *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*, Cambridge: Cambridge University Press. = (2001) 浜林正夫・嶋田耕也・庄治信(訳)『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店。
- 今井弘道(2004)『丸山眞男研究序説：「弁証法的な全体主義」から「八・一五革命説」へ』風行社。
- (2006)『三木清と丸山眞男の間』風行社。
- (2008)「丸山眞男と一九二〇・三〇年代の思想：田辺元・ハイデッガー・アーレントを手掛かりとして」名和田是彦(編)『社会国家・中間団体・市民権』法政大学出版局, 223-273.
- 石田雄(1998)「日本政治思想史学における丸山眞男の位置：「緊張」という視角を中心として」『思想』883(1): 26-41.
- 姜尚中(1997)「丸山眞男における〈国家理性〉の問題」『丸山眞男論を読む』情況出版, 6-39.
- (2003)『マックス・ウェーバーと近代』岩波現代文庫。
- 葛西弘隆(1999)「ナショナル・デモクラシーと主体性：丸山眞男の民主主義論再考」『思想』896(2): 64-92.
- 川崎修(1998)「解説」丸山眞男『忠誠と反逆：転換期日本の精神的位相』ちくま学芸文庫。
- 荻部直(2006)『丸山眞男：リベラリストの肖像』岩波新書。
- 小林正弥(2003)「丸山眞男と公共哲学：論争的構図」小林正弥(編)『丸山眞男論：主体的作為、ファシズム、市民社会』東京大学出版会, 1-37.
- Mannheim, Karl (1924) "Historismus," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 52(1). =(1969) 森博(訳)「歴史主義」『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣版, 3-71.
- (1931) "Wissenssoziologie," in Vierkandt, Alfred (hrsg.) *Handwörterbuch der Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke, 659-680. =(1969) 森博(訳)「知識社会学」『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣版, 195-259.
- (1952) *Ideologie und Utopie*, Frankfurt am Main: Schulte-Bulmke Verlag. =(2006) 高橋徹・徳永恂(訳)『イデオロギーとユートピア』中公クラシックス。
- 丸山眞男(1936)「政治学に於ける国家の概念」『丸山眞男集第一巻』岩波書店, 5-32.
- (1940)「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」『丸山眞男集第一巻』岩波書店, 125-307.
- (1942)「神皇正統記に現われたる政治観」『丸山眞男集第二巻』岩波書店, 163-178.
- (1943)「清原貞雄「日本思想史 近代国民の精神生活」上」『丸山眞男集第二巻』岩波書店, 205-217.

- (1944) 「国民主義の「前期的」形成」『丸山眞男集第二巻』岩波書店, 225-268.
- (1946a) 「近代的思惟」『丸山眞男集第三巻』岩波書店, 3-5.
- (1946b) 「超国家主義の論理と心理」『丸山眞男集第三巻』岩波書店, 17-36.
- (1947a) 「陸羯南：人と思想」『丸山眞男集第三巻』岩波書店, 93-106.
- (1947b) 「科学としての政治学」『丸山眞男集第三巻』岩波書店, 133-152.
- (1951a) 「日本におけるナショナリズム」『丸山眞男集第五巻』岩波書店, 57-78.
- (1951b) 「戦後日本のナショナリズムの一般的考察」『丸山眞男集第五巻』岩波書店, 89-122.
- (1952) 「「日本政治思想史研究」あとがき」『丸山眞男集第五巻』岩波書店, 283-294.
- (1953) 「野間君のことなど」『丸山眞男集第六巻』岩波書店, 9-14.
- (1959) 「日本における危機の特性」『丸山眞男座談3』岩波書店, 139-194.
- (1961) 「思想史の考え方について」『丸山眞男集第九巻』岩波書店, 45-81.
- (1966) 「現代日本の革新思想」『丸山眞男座談6』岩波書店, 1-314.
- (1975) 「南原先生を師として」『丸山眞男集第十巻』岩波書店, 171-196.
- (1978) 「思想史の方法を模索して」『丸山眞男集第十巻』岩波書店, 313-347.
- (1980) 「歴史のディレンマ」『丸山眞男座談8』岩波書店, 234-261.
- (1983) 「「日本政治思想史研究」英語版への筆者序文」『丸山眞男集第十二巻』岩波書店, 75-107.
- (1998a) 『丸山眞男講義録第一冊：日本政治思想史1948』東京大学出版会.
- (1998b) 『丸山眞男講義録第三冊：政治学1960』東京大学出版会.
- (1999) 『丸山眞男講義録第二冊：日本政治思想史1949』東京大学出版会.
- 松沢弘陽 (2002) 「丸山眞男における近・現代批判と伝統の問題」大隅和雄・平石直昭(編)『思想史家丸山眞男論』ぺりかん社, 274-381.
- 三宅芳男 (1996) 「丸山眞男における「主体」と「ナショナリズム」」『相關社会科学』6: 57-70.
- 森政稔 (1993) 「丸山眞男の近代」『ライブラリ相關社会科学1：ヨーロッパのアイデンティティ』新世社, 204-225.
- 中野敏男 (2001) 『大塚久雄と丸山眞男：動員、主体、戦争責任』青土社.
- 新倉貴仁 (2008a) 「ナショナリズムの再生産の機制とその解除の可能性：Benedict Andersonにおける「歴史の天使」」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』73: 69-84.
- (2008b) 「ナショナリズム研究における構築主義：ベネディクト・アンダーソンの知と死」『社会学評論』59(3): 583-599.
- 小熊英二 (1998) 『〈日本人〉の境界』新曜社.
- (2002) 『〈民主〉と〈愛国〉：戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
- Özkirimli, Umut (2005) *Contemporary Debates on Nationalism: A Critical Engagement*, Basingstoke: Macmillan.
- 酒井直樹 (1996) 『死産される日本語・日本人：「日本」の歴史 - 地政的配置』新曜社.
- (1997) 「丸山眞男と戦後日本」『丸山眞男論を読む』情況出版, 63-80.
- 笹倉秀夫 (1998) 「丸山眞男における〈生と形式〉」歴史と方法編集委員会(編)『方法としての丸山眞男』青木書店, 13-68.
- 佐藤俊樹 (2006) 「閥のありか：言説分析と「実証性」」佐藤俊樹・友枝敏雄(編)『言説分析の可能性：社会学的方法の迷宮から』東信堂, 3-25.
- 孫歌 (2006) 「丸山眞男における「政治」」『思想』988(8): 36-53.

- 徳永恂 (1996) 『社会哲学の復権』講談社学術文庫.
- 友枝敏雄 (2006) 「言説分析と社会学」佐藤俊樹・友枝敏雄(編)『言説分析の可能性：社会学的方法の迷宮から』東信堂, 233-253.
- 内田隆三 (2001) 「二十世紀の像を求めて」山脇直司・内田隆三・森政稔・米谷匡史(編)『ネイションの軌跡：20世紀を考える(1)』新世社, 1-6.
- (2005) 『社会学を学ぶ』ちくま新書.
- 鷲田清一 (2007) 『思考のエシックス：反・方法主義論』ナカニシヤ出版.
- Weber, Marianne (1950) *Weber: ein Lebensbild*, Heidelberg: Verlag Lambert Schneider =(1987) 大久保和郎(訳)『マックス・ウェーバー』みすず書房.
- 安丸良夫 (2002) 「丸山思想史学と思惟様式論」大隅和雄・平石直昭(編)『思想史家丸山眞男論』ペリカン社, 183-229.